

漱石の朝日時代とその周辺

濱 川 博

人生は出会いである。それは、時として大いなる祝祭ともなる。――夏目漱石が東大英文科講師から朝日新聞社員になったのは、明治四十年四月のことである。漱石の転身を考えるとき、私はドイツの詩人・作家ハンス・カロッサのこの言葉を連想する。そのころ、東大では、漱石を教授に昇格させる話が進んでいた。社会的地位のきわめて高いといわれた大学教授の椅子を蹴って、一新聞社員になることは、破天荒ともいえる一つの事件だと見られた。漱石も悩みに悩みぬいたあげくの一大決心であった。もし、漱石の転身がなかったとしたら、近代文学に異彩を放つあれだけの文業が果たして結実し得たかどうか。すくなくとも違ったかたちものとなっていただであらう。漱石と朝日新聞との出会い、厳密に言えば、主筆池辺三山との出会いこそが、文学者漱石の運命を決定的なものにしたともいえる。まこと、カロッサのいうように、人生はまさに出会いであり、時としてすばらしい祝祭ともなり、不思議な運命の歓喜ともなった一つのよき例がここにある。

平成二年七月十日発行の『朝日新聞社史 明治編』（朝日新聞百年史編修委員会編）によると、朝日はすでに明治二十年坪内逍遙の入社を勧誘したが、実現しなかった。「そのときは東朝創刊の直前で、逍遙に小説のみならず論説をも書かせて紙面に清新の気を吹きこもうという意図があった」という。それから二十年後、文学者漱石の入社が

決まったとき、漱石は四十一歳だった。「ホトトギス」に『吾輩は猫である』『坊ちゃん』を発表し、「新小説」に『草枕』を発表して、文名が高まっていた。朝日の漱石に対する期待は大きかったであろうし、漱石もまた「人生意気に感ずる」と「入社の辞」に書き、作家としての本格的な生活に入ったのだから、この事件は双方にとって、まことにおめでたい出会いであったといえるだろう。板垣直子が「朝日新聞は漱石といふ文豪を作り、世の中に対してよいことをしてくれたいふことができる。漱石を占有したことから当時新聞自身のえた商業価値も勿論大きかったろうが、日本の文学全体のために貢献するところが大きかった」（『漱石・鷗外・藤村』昭二一・巖松堂）と言ったのは、けだし、的を射た評といえるだろう。

漱石の入社を働らきかけたのは、朝日ばかりではなかった。読売新聞は主筆竹越与三郎（三叉）が中央公論の滝田樗陰を通して勧誘する一方で、当時文芸記者だった正宗白鳥は、駒込の漱石を訪ね、原稿を依頼するとともに、漱石の意向を打診している。

「竹越が提示した条件は、読売の文壇欄を担当して隔日に一欄か一欄半書いてもらい、月給は六十円ということであった。漱石の心はうごいたが、地位が不安定で、月給もあまりにすくない、など意に満たぬ点があったため、断りの手紙を書いている」（『朝日新聞社史』）

漱石との交渉については、白鳥自身が『文壇人物評論』にこう書い

ている。

「読売入社の件は無論黙目であったが、間もなく日曜の文芸付録へ一篇の評論を寄稿されたのが、漱石が読売に対する寸志と見るべきであった。……読売では前途に不安を感じて乗り気にならなかった彼が、朝日ならと乗り出したところに彼の人生観察の目の動きが見られる」

読売の月給が六十円に対し、朝日は二百円で迎えたのだから、漱石の心が読売に動かなかったのも無理はない。樗陰はちに読売の条件が失敗の原因だったと語っている。『読売新聞八十年史』（昭和三十年十二月一日発行）は「惜しくも漱石を逸す」と題して、次のように記している。

「もう一つ竹越の念願は、読売新聞を再び往年の華やかな文学新聞とすることであった。それには紅葉のような文豪を読売専属の寄稿家として招くことで、当時『坊ちゃん』や『草枕』などを発表して、文声の高まった夏目漱石に白羽の矢を立て、竹越は何回か漱石の家に足を運んでその内諾を得た模様であった」

「内諾を得た模様」とあるから、漱石の心もかなり動いていたのである。読売は明治三十九年十一月二十日付「社告」で、はやばやと予告してしまった。

「夏目漱石君は文壇の新星にして、其光芒燦爛、四方を照すの概あるは縷説を要せず、我社幸に同君に請ふて特別寄稿家たる約諾を得たるを以て、今後読売新聞紙上に其創作批評を公表せらるべし。最も注目すべきは一月以後の新聞にありと雖も、年内に於ても名品を読者の前に供することあるべし」

この「社告」は、どうやら竹越の早やとちりであり、勇み足であったようだ。漱石は「作物の批評」という評論を一編読売に発表しただけで、「社告」のいう「名品」は、その後読者の前にはついにあらわれなかった。「竹越は何回も嘆願的に寄稿を依頼したが、ついに読売には安心して一身を託することができないという理由で正式に拒絶さ

れた」と同社史はいう。そして「惜しくも漱石を逸す」は、こんな文章で結ばれている。

「夏目漱石の招へい失敗は、竹越主筆の痛恨事であった。非常な意気込みで新聞時代の実現を夢みた竹越は、同年六月末すっかりいや気が差してあっさり退社し、論説よりも弁舌なりと全国遊説の旅に上り、代って足立北鷗が主筆に返り咲いた」

漱石を招いて、一花咲かせようと夢みて失敗に終わった竹越の無念さは、推して知るべきだが、明治四十年六月十七日から十九日にかけて、時の首相西園寺公望が文士の招待会を催したのは、竹越の肝入りで実現したのだった。『読売新聞八十年史』には、こう記されている。

「招待された文士の大部分は、従来から読売新聞と深い関係のある人ばかりであった。ある日竹越が編集室で、『西園寺に勧めて文学者を招待させようと思うが、ひとつ人選をしてくれんか』といった。当時文芸欄を手伝っていた近松秋江は、これを聞いて喜んでその人選を引受け、竹越に手渡した。竹越はそれを基礎にして二、三の評論家と新聞記者を加え西園寺に伝えたのであった」

招待の初日は、あいにくの雨だったので、この会は「雨声会」と名づけられた。この日の出席者は、川上眉山と広瀬柳浪、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉の五人。翌十八日は森鷗外、巖谷小波、後藤宙外、小杉天外、泉鏡花、徳田秋声の六人。十九日は大町桂月、幸田露伴、塚原波柿、内田魯庵、島崎藤村、国木田独歩の六人だった。坪内逍遙と二葉亭四迷、夏目漱石の三人は、辞退して行かなかった。同八十年史によると、漱石は辞退の心境を「ほととぎす圃で書いて出かねたり」の一句に託して西園寺に送ったところ、首相は雨声会での寄せ書きに「待つかひの姿は見えす杜鵑」と即興の句をしたためて、風流宰相ぶりの一端をのぞかせた。

西園寺は明治四年から約十年間フランスに留学し、ゾラやゴッティエを受読、十三年十月に帰国したが、十五年には中江兆民らと「東洋自由新聞」を発行し、新しい時代の息吹きを広めようとしたが、長統

きはしなかった。激動の近代史のなかで、影の宰相として常に政界に君臨した彼は、昭和十五年十一月二十四日、九十二歳で永眠した。島崎藤村は彼が息をひきとったその日の新聞に奇しくも「雨声会」の思ひ出を書き「兎角縁の下の力持のやうな文学者の位置を高める上にも、あの会は間接に役に立つたかと思ふ」と往時をなつかしんでいる。漱石の勧誘に失敗して読売を去った竹越の無念さは、藤村のいう文士の地位向上に一役買った雨声会を実現させたことで、いくらか慰められたであろうか。

そもそも、漱石を朝日に招へいしようと言ひ出したのは、大阪朝日の主筆鳥居素川であった。明治三十九年十一月、漱石の『草枕』を読んで感動した素川は、新年の紙面に漱石の随筆を載せたいと、画家の中村不折を通じて頼みこんだが、実現しなかった。素川は漱石の歿後、大阪朝日に書いた「漱石君を悼む」でこう記す。

「殊に自分は小説嫌ひである。読まず嫌ひである。小説なるものは男女の關係を書いたもので、土君の手にすべきでない。書くものの人物は勿論、之を読むものも卑しむべしと言ふ独断から、所謂小説といふものを読まなかった。所が日常の勤務に疲れた頭を医すべく、春の暮れ方の何時であつたか、夏目君の著作を今一度読んで見ようと、今度は『鶉籠』と言ふのを袖にし、阪神線の蘆屋の麦畑の畔の小川のそゝり流るゝ所に、蝙蝠傘に顔を蔽ひ、葦や連華草を枕にして、心静かに『鶉籠』を読んで見た。はてな、唯の小説ではない。殊に篇中の『草枕』に逢着し、はてな、われらの論ずる所を君は小説で書いてゐる。偉い、唯の人物でない。仰げば蒼天、附せば草枕。自分は此の時を以て君の筆に融合してつた」

素川はさっそく『鶉籠』を朝日新聞社主の村山龍平や上野理一に読むよう熱心にすすめた。これが漱石の朝日入社登壇となった。『草枕』が漱石の人生を大きく変えた記念すべき作品となったわけだ。漱石は明治三十九年十一月の「文章世界」に「余が『草枕』の一文を發表、次のように言っている。

「私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯一種の見方―美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない」

全く以心伝心とでもいうほかはないが、素川が漱石を招こうと動きはじめたころ、東京でも漱石と朝日を結びつけようとする動きが期せずしてあつた。当時東大の学生だった坂元三郎（雪鳥）と漱石より一足先に入社し、東京朝日の社会部長になった浜川玄耳の二人であつた。坂元は漱石が五高教授だったころの教え子である。漱石を俳句の師とし、寺田寅彦ら五高生と熊本の若い俳人らで組織した俳句グループ紫溟吟社のメンバーの一人だった。浜川は、そのころ熊本の第六師団法官部理事候補として俳句をたしなみ、師団内の俳句仲間と紫溟吟社に加わって、漱石や坂元とも顔なじみであつた。三人は俳句によって結ばれた十年來の知己ともいえる間柄で、浜川と坂元は、漱石の入社に奔走して一役を果たし、のちには三人揃って朝日社員として働くことになるのは、なんと不思議なめぐりあわせであろう。人生は出会いであるとは、ここでもまた言い得られる言葉であろう。

浜川は明治五年佐賀県生まれ。長崎市立商業学校から国学院へ進み、東京法学院にも学んだ。『朝日社史』によると、浜川は日露戦争に従軍した際、たまたま朝日新聞特派員の弓削田精一と知りあつた。弓削田は浜川の文才を評価し、池辺主筆に推薦した。こうして浜川が朝日に書いた「陣中の二十四時間」や「陣中写生帖」などの文章が池辺の注目するところとなり、やがて社会部長への起用と発展した。法務官から新聞記者への転身話がまとまったのは、明治三十九年の末ごろで、浜川は三十六歳であつた。浜川の紹介で坂元も朝日の月曜文芸欄に随筆を寄稿するようになり、二人の間で「夏目先生を朝日へ」の話が持ちあがつた。読売が「社告」を出して間もないころで、「朝日社史」には次のように記されている。

「浜川の東朝への正式入社は三月一日だが、すでに浜川の胸には社

会部長としてのさまざまな抱負があったにちがいない。とくに社会面と小説欄の改革については、三山からなんどもきかされていたであろう。しかもその小説欄は社会部の所管であった。いきおい洪川としても真剣にならざるをえない。「夏目先生を朝日に紹介」することは、小説欄にとって大きなプラスである、と洪川は考えた。そして、さっそくかれは行動にうつった」

大阪の鳥居素川と相呼応するかのようには、東京で洪川や雪鳥らの同じような動きが進行していたのは、偶然というには、余りにも偶然すぎるべきことであつたというほかはない。洪川の本名は柳次郎、玄耳は雅号で、ペンネームは藪野掠十といった。玄耳の生誕百年を記念して昭和四十八年六月『洪川玄耳句集』が熊本市の「青潮社」から出版された。編者は高田素次という熊本の人。玄耳の句が千余も収録されている。「あとがき」によると、編者は四十年の歳月をかけて玄耳の句を集めたという。だれにも真似のできることはない。明治三十一年の作句「雁鳴くや新民法の解し難き」を筆頭に、紫溟吟社時代「子規庵を懐ふ」で詠んだ「虫千の蓑に病やいきどほる」から大正十五年作の「魔法瓶に茶あり寒夜の卓の上」まで千余の句が年代順にならべられ、玄耳の句境をうかがい知る労作となっている。

玄耳が朝日を退社したのは、大正元年十一月、四十一歳だったから、在社はわずか五年余にすぎない。しかし、入社後藪野掠十の名で朝日に書いた「東京見物」は、たいへん好評で、引きつづき鎌倉見物、奈良見物、朝鮮見物を連載、最後は世界見物を書いた。『玄耳句集』の「あとがき」には、こう書かれている。

「漱石は『東京見物』の序に『東京見物』が東朝紙上にあらはれたのが、余の入社と前後したため、且つは其筆致の『猫』に似てゐるため、掲載の当時は、漱石だ漱石だといふ評判が大分八釜敷かつたので、掠十先生は余に対して、どうも御迷惑で、と言ひ、余は掠十先生に向つて、どう仕りまして、あなたこそさぞ、と言つた。考へてみると、この挨拶も余計な事である。余計な世話を焼くものがあればこ

そ、余計な挨拶もせねばならぬ仕儀となる」

漱石が玄耳の筆致を『猫』に似ているといい、読者が「東京見物」の筆者を漱石だと間違えたことは、次の玄耳の文章を見れば、なるほどとうなずく人も少なくはないであろう。玄耳が大正二年至誠堂から出版した『一萬金』という本の序文である。

「予が新聞記者の生命は僅かに五年九個月を以て終つた。

予が新聞記者に為つたのは愚であつた。羅めたのは更に愚であつた。

本書は辞職当日より一家離散に至る十数日間の日記である。此の様な日記をつけるのも愚だし、之を出版するのは愈愚である。其の内容に至つては、愚中の至愚である。故に之を『愚史』と題したのであつたが、書店の主人はそんな名は可けません、何かおもひ名を命けて下さいと言つた。

此の場合おもひ名が命けられるもんかと思つたが、此方は内容さへ愚でとせば名なんかどうでもかまはない。そこで巻末の語を取つて『一萬金』と命けると、いや是は真におもひいと大喜びで飛んで行つた。本屋も亦愚だ」

大正九年十月、玄耳の歌集『山東に在り』が出版されたあと、高濱虚子は「ホトトギス」の大正十年六月号に「玄耳君の俳句は此頃見ない。物を客観的に見る俳句は、君を満足させないのであらう。また恐らくそれは君の長技ではあるまい。歌によつて玄耳君の面目は始めて躍如たるものがある」と評したことが『玄耳句集』の「あとがき」にみえる。『山東に在り』は、玄耳が中国の青島にいたころの自選歌集。与謝野寛はこの歌集をたたえ

かの奇才玄耳ひとりをいれかねて 旅にあらしむ小さき日の本と詠んだことが、後藤是山という人の『玄耳句集』の「序にかへて」に記されている。明治四十二年三月、朝日の編集長佐藤真一（北江）の紹介で校正記者として入社した石川啄木の歌才を見出し、朝日歌壇を復活して、啄木を選者に抜てきしたのは、洪川玄耳であつた。

啄木が翌四十三年十一月歌集『一握の砂』を出版したとき、蔽野棕十の名で序文を書いたのも玄耳である。俳句と短歌をよくし、文章家としても漱石と間違がわれるほどの才筆を発揮し、『支那閩房秘史』（昭和三年九月・香蘭社書店）などの著作を世に問うた玄耳は、鉄寛がいみじくも言ったように、明治のかくれた「奇才」のひとりであったのだろう。

明治四十五年二月、中央公論に「淪落の女」を発表して、社会部の名文記者とうたわれた松崎天民が徳富蘇峰の国民新聞から朝日へ転社したのは、渋川を通してであった。四十二年一月のことである。当時の東京朝日には、池辺吉太郎（三山）を主筆に、松山忠次郎、渋川玄耳、杉村楚人冠、佐藤北江、弓削田精一、桐生悠々、安藤正純、米田實ら錚々たる大記者をはじめ、社会部には山田笑月、西村醉夢、坂元雪鳥、美土路昌一（春泥）らがいて、活気にあふれていた。天民が記者時代を回想した『人間秘話』（大正十五年・成光館）には、当時の編集局風景が描かれている。

「私達は渋川氏に連れられて、池辺氏を初め、佐藤、松山、土屋と言ふ順に次々に紹介された。その年の中央公論新年号に八時子／＼を書いた杉村楚人冠氏は、病後と見え大島紬の着流しで、ヒョロリとした姿を見せて居た。夏目漱石氏は月末になると顔を出して居たが、既に入社して居た長谷川二葉亭氏は、一度も姿を現したことは無かった。朝日には此の他饒庭簗村、半井桃水、武田仰天子など言ふ出社せぬ社員格の人が多かった。客員では中村不折、瀧筋庵など言ふ人々が重視されて居た」

大島紬を着流した楚人冠、月末に一度だけ顔を見せる漱石、一度も出社しようとしなかった二葉亭四迷や樋口一葉に小説の手ほどきをした半井桃水らの個性きらめく群像。どこか、おおらかで自由なふんいきに包まれていた明治末期の新聞社風景がしのばれる。

さて池辺の意向で漱石招へいの交渉に当った坂元雪鳥は、昭和十二年二月号「国文学 解釈と鑑賞」に「漱石先生を打診した日」という

随筆を書いた。この文章と雪鳥の未発表の手記「西片町の二文豪」をあわせて、交渉の様相が「朝日社史」に、次のように出ている。

「西片町十番地の夏目漱石氏を訪ふ。…三山翁の意を体して内偵に来れるを以て、成丈け漠然と軽き意味にて種々の質問応答あり。読売との御関係如何。若し朝日社或は其他の社にても全然師の御入社を乞ふ事あらば、条件によりては、目下御奉職の各学校を御止めになる事を得可きや。読売との関係は極めて簡単なり、書いたら出さう位也。学校は止められぬ事なし、寧ろ学校に出るは五月蠅い感に堪えず、併し又或意味に於ては気楽なり…唯余が教員たると記者たると、何れが真の適地なるやは容易に判断し難きも、或は記者にはあらずやと思はる。但し今の話は無論即答を望まるゝものにはあらざる可ければ、尚熟考す可し」

漱石は雪鳥の質問に即答はさけながらも、自由な創作活動への意欲を見せている。学校に出るのはうるさいが、一方では気楽でもあるというジレンマ。教師か作家か、二者択一を迫られた苦悩がうかがわれる。明治三十九年九月三日付高濱虚子への手紙には「実は来学年の講義を作らなければ、大雄篇を書くか大読書をやる積りだが、講義といふ奴はひと苦勞です」と次のように、したためている。

「小生は生涯に文章がいくつ書けるか夫が楽しみに候。又喧嘩が何年出来るか夫が楽しみに候。人間は自分の力も自分が試して見ないうちには分らぬものに候。（中略）小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に対する義務であり且つ天と親とに対する義務だと思ひます」

漱石は東京大学のほかに一高と明治大学へも出講していた。東大では年俸八百円、一高が七百元、明大は週一日四時間講義して三十円の報酬だった。一カ月に三校あわせて百五十円くらい。松岡譲は『漱石・人とその文学』（昭和十七年・潮文閣）で言う。

「感受性と同時に責任感の人一倍強い彼には、この両立し難い二つのものが同時に自分に併存してゐるのが堪らなく厄介なのだ。勿論飽

く迄義務に忠実な漱石は、教師は本来柄にないものと覚悟はしてゐるものゝ、それをいゝ加減に放たらかしてやるやうな無責任は決してやらない。やらないからなほ更の事苦しいのである。だから創作に油の乗り切った彼には、いかにそれが重荷であつたか想像に難くないところだ」

漱石は大学教師を三年もやると真面目な人なら、きっと神経衰弱になると言つていたことが、石山徹郎の「夏目漱石―その生涯と作品」(昭和七年六月・日本文学社発行『明治文学史集説』)に見える。神経衰弱になるほど、講義に熱中してゐたのである。講義内容は丹念にノートを作り、それが深夜に及ぶことは珍らしくはなかつた。東大での講義録『文学論』『文学評論』の名者は、そうした骨身を削るような精進の産物であつた。講義ノート作りには、大いに骨を折つた漱石も、小説を読んでいると、十分間に三十秒くらいは、奇妙に感興がわいてくると虚子への便りに書いてゐるから「やめたきは教師、やりたきは創作」への思いは、日ましに強まるばかりであつた。明治三十九年十月二十六日付鈴木三重吉への手紙には、こう記されている。

「苟も文学を以て生命とするものならば、単に美といふ丈では満足が出来ない。丁度維新当時の勤王家が困苦をなめた様な見にならなくては黙目だらうと思ふ。間違つたら神経衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする見でなくて文学者になれまいと思ふ。(中略)僕は一面に於て俳諧的文学に入出すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすてて易につき、劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文学者の様な氣がしてならん」

なんという激しい文学への欲求であらう。創作一筋に命をかけたといふ意欲をみなぎらせながらも、半面、地位の安定した大学教師を隠居仕事のように氣楽だと思ふ氣持もあつて、内心はハムレットのような心境にも似て大いにゆれ動いてゐたにちがいない。そんな折も折、朝日や読売から招へいの話がふつてゐたように起つたのである。

昭和十年四月号「新潮」に「夏目漱石研究」の座談会が載つてゐる。出席者は徳田秋声、野上豊一郎、和辻哲郎、内田百閒、湯地孝、片岡良一、室生新、中村武羅夫の八人。野上豊一郎が大学二年のとき漱石は朝日に入社した。野上はいう。

「あの頃の大学の先生といふものは非常に偉いものだった。―今だつて偉いでせうけれど、それを辞めて新聞記者になるといふことは、普通でないような印象が一般にあつたやうですね」

「私なんかも反対する―といふやうな資格はなかつたけれども、反対してとめた方です。それは自分達の良い先生が無くなるからといふ当分の必要からでもあつたのですが、その頃先生に長い手紙を貰ひました。先生の考へでは、新聞記者になることが少しも不名誉ではない。文学を専心やれるといふ便宜がより多く得られるし、自由の生活も出来る、という事情もあつて、寧ろ勇躍して大学の講義を去つたやうです」

「勇躍して大学を去つた」という野上の発言は、当時の漱石の心境をよくおしはかつてゐるといへそうである。それは、あとで記す漱石の朝日「入社」の辞からも、そういえる。東大では六時間、一高では十五、六時間も教えてゐたのだから、まさに重労働であつた。いい加減な講義ですますことができず「よく調べてくる先生」(野上)なので、創作に打ちこむ時間の余裕はなかつたのであらう。創作にかかると休講したこともあつたらしい。野上の言によると「草枕」は一週間休講して書きあげられたという。和辻哲郎も「朝日に入つてからは身体調子もよくなつたと見えて、一体に機嫌が好くなつた。語学の教師の頃はかなり機嫌が悪かつたのだが」と言つてゐる。持病の胃弱が不機嫌の一因だつたのだろうか、教師という職業が性にあわない一面もあつたのは、たしかなやうだ。

漱石に南画の手ほどきをした津田青楓に「良寛の人間性」(昭和三十年三月「国文学 解釈と鑑賞」)の一文がある。「漱石は嘘をつく人間がきらいだった」と津田は次のように記す。

「世間には丸々嘘でかたまってる人間がある。軍人とか教師とか牧師とか言ふ職業の人間は大体嘘つきが多い。政治家も無論さうかも知れない」

津田に言わせると、軍人はいつもシャチコばって威厳を示そうとするし、教師も生徒に馬鹿にされないように物知り顔をする。牧師は腹から善行をしているように見せかけ、政治家の嘘つきは周知のことで「本心でないことをやってゐる人間は、非人間的で面白くない」という。私は津田の文章を読みながら反射的にボードレールの「赤裸の心」のアフォーリズムを連想した。それは「銜学に就いて―教授のそれ、裁判官のそれ、僧侶のそれ、大臣のそれ、あきれ果てたる世の名士、諸新聞の主幹」の一節である。津田がこの一節を読んでいたかどうかは知る由もないが、津田とボードレールに心情の照応を見る思いがする。漱石は学生の答案を採点したり評価することが、あまりに良心的でありすぎたので、気が重かったのではないかと、片岡良一は座談会で語っている。では、教師時代の漱石像はいったいどうだったのだろう。

松山中学の英語教師として赴任したのは、明治二十八年、漱石二十八歳のときである。当時の教え子真鍋嘉一郎が昭和五年八月十一日付の新聞に「漱石先生のこと」という思い出を書いてゐる。真鍋はのちに医者になり、漱石臨終のときは、つききりで看病し、最後の脈搏を見とどけるのだが、その回想記はまことに面白く興味つきない。それによると、漱石が着任早々、生徒の間では「英語の先生のくせに紋付はかまで学校へ出てくるなんて、第一変な奴だ。あんな先生は英語が出来るかどうかかわかったもんじゃなし」という噂があがった。当時の松山中学では、新参の教師をいじめることが慣例になっていた。さっそく漱石の寢床にバツタを放ったり、教室で真鍋が難問をふきかけ、漱石を困らせる役となった。真鍋は棚一郎のウエブスター辞書を一生懸命暗記して教室に出た。漱石が黒板に書いた英語のスペルが間違っていたのか、それとも発音がおかしかったのかはふれていないが、真

鍋はいきなり「先生」と大きな声で怒鳴ったあと「それはちがっています。辞書にはこう書いてあります」と言って漱石をやっつけた氣でいた。すると漱石は平然として「辞書が間違っているんだ。なおしておけ」と言った。これには、さすが腕白ぞろいの生徒たちも二の口がつけず「年は若いが出来るぞ」と恐れをなしたという。

漱石はすかさず早口で英語をペラペラしゃべり「真鍋君いまの通りに言ってみて」と逆襲した。真鍋少年は「あまり早うて分らんけれどもうちと、ゆる／＼やっておくれんかな、もし」と松山弁で答えるのが、せいいっぱいだった。「先生はそのまま『坊ちゃん』の中におけることを書いてしまった」と追懐している。

生徒たちが氣負いこんだ新米教師いじめも、こうして全く歯がたたなかったばかりか、反対にやりこめられてしまった。がぜん生徒間では、えらい先生だと評判になった。真鍋はすっかり漱石にほれこみ、靴磨きでもなんでもするから書生にしてくれと頼みこんだところ、漱石は「よし、おいてやる」と言ったという。なんとも、ほほえましいエピソードである。松山中学での漱石のあだ名は「華族の若様」だった。「おちついていて、静かな上品な上上で心のべらんめえを包んでいる」という意味らしい。「講義は滅法やかましかった。文章の一字一句を決してゆるがせにできなかった。先生の講義をきいて英語の奥深い味はひが始めて解った」と真鍋は書いている。

医者になった真鍋が本郷界隈でバツタリ漱石に会ったら「君はやぶ医者だから、おれの小便でも検査していれればいい」と相変らずのくまれ口をたたいた。真鍋が外遊から帰国後、大学の講師を兼ねることになり、あいさつに伺うと、漱石は祝福するどころか「教授は一時間の講義に三日も苦心するのに、学生はうわの空で聞き流す。大学教授なんて、つまらぬから辞めてしまえ」といった。「おれもそんな氣がしていたので、この一言で先生が大学教授をやめて、天分を発揮する自由の境地を求められた氣持がわかり、先生はやっぱりえらいと思つた」と記している。漱石が臨終の床にいたとき、「おれの生命は君

に委ねる」と眞鍋に言う。「小便医者から出世したばかり」とは、かつて漱石が眞鍋に言った言葉だが、そんな彼が先輩の宮本博士を呼んで診察してもらおうと相談すると、漱石は怒って「おれが生命を託して安心しているのに、君にはおれの信頼の心がわからぬのか。後見付でなければ脈がとれぬようなら医者をやめろ」と叱りとばしたという。「だが、うれしかった。医者としての固い信念が始めて胸に燃えて、それ以来おれは後見付の治療は一切御免蒙ることにした。一生の感激だった」——この師にしてこの弟子あり。なんと美しい師弟愛の人間的不ふれあいであろう。松山中学で出会って以来終生続いた劇的ともいえるこんな師弟の間柄は、そうざらにあることではないだろう。

永き日や欠伸うつして別れゆく

こんな一句を残して漱石が松山から熊本第五高等学校へ転任したのは、明治二十九年四月、熊本在住は足かけ五年を数えた。寺田寅彦は当時の五高生だった。漱石は着任二ヵ月後の六月八日鏡子夫人と結婚、在任中六回も転居している。内坪井町の家で長女筆子が生まれた。家賃は十円、洋風の応接間もある立派な家だった。五高でも漱石は名物教授だった。寅彦が昭和七年十二月「俳句講座」に発表した「夏目漱石先生の追悼」にこんな一節がある。

「先生のお宅へ書生に置いて貰へないかといふ相談を持出したことがある。裏の物置なら明いて居るから来て見ろと言って案内された。その室は第一、畳が剥いてあって、塵埃だらけで本当の物置になって居たので、すっかり悄気てしまつて退却した。併し、あの時いゝから這入りますと言ったら、畳も敷いて綺麗にしてくれたであつたらうが、当時の自分には、その勇気がなかったであつた」

寅彦の追憶によると、学生の中に質問好きな男がいて、根掘り葉掘りうるさく聞くと、漱石は、「そんなことは、君、書いた本人に聞いたって分かりやしないよ」と言つて撃退したという。松山中学で眞鍋の難問をしりぞけた漱石の意気込みは、いささかもかわらなかつた。

「同窓の一部の人々には大層こはい先生だったさうであるが、自分に

は、ちつともこはくない最も親しいなつかしい先生であつた」と寅彦はいう。

松山では眞鍋が、熊本では寅彦が書生を申しこんでいるほどだから、教え子たちにとっては、よほど魅力のある先生であつたにちがいない。昔のこととはいへ、そんなに慕われた教師がどれほどいただろう。まさに教師、冥利につきるともいえるだろう。それでも、漱石の内面にふつふつとわいてくる創作活動へのやみがたい欲求はどうすることもできなかった。漱石が同僚の山川信次郎と阿蘇山に登つたのは、明治三十二年初秋のころ。このときの経験がのちに短編「二百十日」となり「草枕」となったが、これより早く明治三十年四月十六日付の正岡子規への手紙には

「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり。換言すれば文学三昧にて消光したきなり。月々五、六十の収入あれば、今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覚悟なれど、遊んで居て金が懐中に舞込むといふ訳にもゆかねば、衣食は小々堪忍辛抱して何かの種を探し（但し教師は除く）その余暇を以て自由な書を読み自由な事を云ひ自由な事を書かん事を希望致候」

とあるから、教師をやめて創作一本の生活を夢見ていたのは、五高教授時代からとみてよいだろう。熊本時代は俳句に熱中している。荒木精之の『熊本文学ノート』（昭和三二年・日本談義社）によると、一千近い句を作っている。

衣かへて京より嫁をもらひけり

やすやすと海風のごとき子を生めり

駄馬つゞく阿蘇街道の若葉かな

熊本で初めて家庭を持ち、長女が生まれ、俳句にどう寺田寅彦、坂元雪鳥らの教え子や渋川玄耳を知り、それがのちの朝日入社へと連がってゆく。「草枕」に感動した鳥居素川も熊本の人、素川が兄事した池辺三山もまた熊本の人だった。こうみえてくると、熊本は漱石にとって、きわめて因縁の深い土地であつたといわねばならない。熊本は

東北の仙台と並んで森の都と呼ばれている。熊本を初めて森の都といったのは、五高に着任したばかりの漱石であった。『熊本文学ノート』には、そのことが「肥後史談」に出ていると、紹介されている。

漱石が文部省から二年間の英国留学を命じられたのは明治三十三年。三十六年一月には東京に帰り、四月から一高と東大講師を兼任する。東大はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の後任であった。ハーンが松江中学から五高―東大と歩んだコースは、漱石の松山中学―五高―東大と類似していて面白い。ともに名物教師であった点も似ている。ハーンの東大における独特な名講義は、学生を魅了しつくした。そのあとだけに漱石は最初のころ、かなり苦労したようだ。八雲が東大を去ることに決まったとき、学生たちが騒ぎだし、歌人の川田順は「ハーンなき英文科には、なんの未練もなし」といって、さっさと法科に転科したくらいだから、漱石もやりにくかったのであろう。しかし、学生の騒ぎも間もなくおさまリ、不朽の名著となった「文学論」や「文学評論」の講義に熱心に聞き入った。小宮豊隆は当時の漱石をこう描いている。

「昔私は学生の時分、大学の講義で夏目漱石から西洋の作家といへども少しも恐れるには及ばない。日本人には日本人としての独自の立場がある。その立場に立って面白くないものを面白くないと公言するのには、誰に気兼ねをする必要があるかといふ意味の事を腹吹き込まれた。是は漱石の当時の立場から言って極めて当然な主張であり、殊に当時の社会一般の西洋崇拜の趨勢から言って、青年に対する極めて適切な忠告であった」

小宮と同じようなことを野上豊一郎も先の座談会で指摘している。中村武羅夫が漱石の『文学論』に敬服したと語ったことに関して発言したものだ。

「文学評論―八十八世紀英文学史」あれも非常にオリジナルなものです。西洋の学者の向ふを張って評論してゐる。……ああいふ講義は英文学に於ては、その後誰もないでせう、それ以前は無論なかったで

せう」

「シエークスピアを講義してもシエークスピア学者の書いたおもなものは全部目を通して、その上に出て、それにこだはらないで、自分の立場をもってやって行く、さうして時々シエークスピアをひどくやつけたりする」

「日本人の立場から外国人がかう批判するとか世界の文学の潮流を批判するといふやうなやりかたをした最初の人だらうと思ひます」

小宮と野上という二人のすぐれた門弟の言葉が、前人未踏ともいえる漱石の名講義ぶりを証明している。西洋崇拜の時代風潮のなかで、若い学徒にその奴隷になることをきびしくいましめ、主体性をもって文学する心を説いた漱石の姿がうかがわれる。

類い稀な教師だった漱石にも、いよいよ教壇を去る日が近ずいた。教授から新聞社員になることに、ある意味では胸のすくような思いをいだきながらも、やはり不安感はなくせなかった。それは何よりも入社条件であり、給料のこと、身分保証のこと、小説連載のことなど気にかかることは多かった。雪鳥にあてた手紙には

「一、手当の事、其高は先日仰の通りにて増減は出来ぬものとして可なるや。それから身分の保証、これはむやみに免職にならぬとか池辺氏のみならず社主の村山氏が保証してくれるとか言ふこと。何年務めれば官吏でいふ恩給といふようなものが出るにや。そうして其高は月給の何分の一に当るや。小生が新聞に入れば生活が一変する訳なり。失敗するも再び教育界へ戻らざる覚悟なれば、それ相当なる安全なる見込みなければ一寸動きがたき故下品を顧みず金の事を伺ひ候。

次は仕事のことなり。新聞の小説は一回（年に）として何月位つくくものを書くにや。それから賣捌の方から色々な苦情が出て構はぬにや。小生の小説は到底今日の新聞には不向と思ふ。それでも差支へなきや。尤も十年後には或はよろしかるべきやも知れず。然しそのうちには漱石も今のやうに流行せぬようになるやも知れず、それでも差支なきや。

小生はある意味に於ては大学を好まぬものに候。然しある意味にては隠居のやうな教授生活を愛し候。この故に多少躊躇致候。大学を出て江湖の士となるは今迄誰もやらぬ事にて候。夫故一寸やうて見度候。是も変人たる所以かと存候」

「下品をも願ず」金銭的なことを問ひ、またある意味では大学を好まないが、一方隠居のやうな教授生活への未練を残しながらも、今までだれ一人やらなかった江湖の人への転身をやってみたいと、自らを「変人」呼ばわりしているところに、矛盾を秘めた漱石の天邪鬼の性格がうかがわれる。漱石の朝日入社交渉記録は、荒正人の『小説家―現代の英雄』（昭和三年・光文社）『夏目漱石』（一九六八年・岩崎書店）や古川久『漱石の書簡』（昭和四五年・東京堂出版）などにも出ている。漱石が「下品を願みず」金銭のことを口にかけていることについて、荒正人は「たいへんきちやうめんな人柄だったことを物語っています」と次のように言う。

「漱石のこの態度は、人柄からきたものでもありますが、イギリス留学の時代に学んだ西洋人の生きかたの影響をうけたものともいえます。契約をおもんじ、それをおたがいにはっきりさせておく、という習慣です。むろん漱石は、契約だけでなく、最後のところでは、池辺三山の人柄を信じたからこそ、大学教授をやめて、朝日新聞社の専属作家になる決意をしたのです」（『夏目漱石』）

荒が「貴重な記録」として紹介している朝日入社交渉について「社史」には、次のように出ている。これは雪鳥への漱石の手紙を簡条書きにして弓削田に見せた結果の朝日の回答である。

- 1 手当月給如何。並に其額は固定するか或は累進するか。（月俸二百円、累進式ナリ、但し僕ノ如キ怠ケ者は動モスレバ固定シ易キ傾向アリ）
- 2 無暗に免職せぬと云ふ如き保証出来るや、池辺氏或は社主により保証され得べきか（御希望トアラバ正式ニ保証サスベシ）
- 3 退職料或は恩給とでもいふ様なものの性質如何。並に其額は在

職中の手当の凡そ幾割位に当るや。夫等の慣例如何（既ニ草案ハアルモ未ダ確定ニ至ラズ、併シ早晚社則ガ出来ルナラント信ズ、先ズ御役所並位ノ処ト見当ヲ付ケテ置イテ戴キタシ）

- 4 小説は年一回にて可なるか。其連続回数は何回位なる可きか。（年ニ、二回、一回百回位ノ大作ヲ希望ス、尤モ回数ヲ短クシテ三回ニテモ宜敷候）

5 作に對して營業部より苦情出ても構はぬか。（營業部ヨリ苦情ノ出ル杯イフ事ハ絶対的ニナキ事ヲ確保ス）

6 自分の作は新聞（現今の）には不向とおもふ、夫でも差支無きや。（差支ナシ、先生ノ名声ガ後來朝日新聞ノ流行ト共ニ益々世間ニ流行スベキ事ヲ確信シ切望ス）

7 小説以外に書く可き事項は、随意の題目として一週に幾回出す可きか又其一回の分量は如何。（此事ハ其時々ニ相談致シタシ、多作ハ希望セズ、又ソノ無理ナ事ハ願ハズ、其時々社モ希望ヲ述べ、先生ノ御希望モ伺ヒ臨機ニ都合ヨク取極メタシ）

8 雑誌には今日の如く執筆の自由を許さる可きか。（従来御関係ノ深キ「ホトトギス」へは御執筆自由ノ事、其他一二ノ雑誌ヘ論説御寄稿ハ差支ナシ、但シ小説ハ是非一切社ニ申受タシ、又他ノ新聞ヘハ一切御執筆ナカラン事ヲ希望ス）

9 紙上に載せたる一切の作物を纏めて出版する版權を得らる可きか。（差支ナシ）

以上の朝日の回答を得た漱石は、さらに明治四十年三月十一日付で雪鳥に手紙を送り、「小生の文学的作品は一切挙げて朝日新聞に掲載する」と約し「報酬は御申出の通り月二百円にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞与は頂戴致し候。是は雙方合して月々の手当の四倍（？わからず）位の割にて予算を立て度と存候」と書き、最後に「小生の位地の安全を池辺氏及び社主より正式に保証せられ度事。是も念の爲めに候」とダメ押しをしている。

漱石より九カ月おくらせて、明治四十一年一月朝日に入社した差士路

昌一は、晩年、朝日の社長となったが、昭和四十八年五月、八十六歳で亡くなった。彼は昭和三十七年十月、朝日に「新聞の今昔」を七回連載している。その二回目に「月給、夜勤料」のことが書かれている。それによると、漱石が、入社した当時主筆の池辺三山の月給は百七十円、佐藤真一編集長百三十円、杉村楚人冠百十円、松山政治部長百四十円、渋谷社会部長百二十円で、漱石は「最大の待遇」の二百円だった。ポリーナスも池辺主筆と同じく二百五十円、新入社員的美土路は、月給二十円、夏と年末の賞与がそれぞれ五円、昇給ポリーナス二十円で「誠に雲泥の差」であったと記している。ちなみに小説、劇評専門の特別社員饗庭簗村は百円、樋口一葉の師でもあった半井桃水八十五円、客員中村不折が二十円で、これらの人たちは小説が載り、画が特別に依頼されたときは、別に原稿料が出ていたという。こう見えてくると、漱石の待遇は全く破格的だったことがわかる。それだけ朝日としても漱石の入社に力を入れ、大きな期待を寄せていたのであろう。

美土路に「メ切に追われて」という文章がある。昭和三十年「電通」発行の『五十人の新聞人』に収録されている。それに漱石のことが記されている。早大英文科で若山牧水や北原白秋、土岐善麿らと同級だった彼が朝日に入社して間もないころ、彼の机と並んで新しい机が運びこまれた。だれか新入りでもあったのかと思っていたら、漱石が毎日出社して仕事をするのだという。「嬉しいうな恐ろしいような気がしつつ、心待ちに待っていたが遂に編輯局に出て仕事をするという事は実現しませんでした」と書いている。

そんな美土路が漱石の晩年には、よく会う機会に恵まれた。ある日漱石は美土路に言った。「自分は一度警察の探訪をしてみたい、それにはまず公判を傍聴して記事を書きたいから案内してくれ給え」。絶筆となった「明暗」を執筆中のことである。「明暗」の完結を待ってということになっていたが、漱石の死によって警察探訪はついに実現しなかった。漱石が社会部記者のように公判の傍聴記事を書いたりしていたら、いったいどんな記事を書いたであろう。漱石の好奇心が最

後まで劣えていなかったことを証す興味あるエピソードだが、それが実現しなかったことは「明暗」の未完とともに惜しまれてならぬ。美土路は漱石の入社の時池辺三山が村山社長にあてた手紙を大切に保存していたが、戦災で焼失した残念さをこう書いている。

「文章を見ると随分皮肉な人のように見えるのですが、江戸ッ児のサバサバした人らしく、後になって元朝日の主筆池辺三山氏から村山社長に送った手紙に、同氏の入社交渉に当って相当うるさい注文でもつけられるかと思っただけで、会って見たら直ぐスラ／＼此方から出した条件を受け入れて、実に気持がよかったというような意味が書いてありました。私はその手紙を珍藏していましたが、郷里にかえって留守中に戦災で焼失してまことに残念な事をいたしました」

美土路は同じ文章に、彼の見た小説家の原稿のことを書いている。一番苦心のあとが見えたのは尾崎紅葉で、真黒になるほど文章をなおし、余地のないときは張り紙までしてあったという。作家はたれしも文章に苦心しない者はいないだろうが、私はこれを読んだとき、保田興重郎と野上弥生子の原稿をすぐに連想した。私も記者時代おふたりに原稿を依頼したことがあるが、保田は実に文章にこる人で、その原稿は削ったり加筆したりで、真黒になり、判読に苦労したことがある。野上も同じで、いかにも女性らしく幾個所もていねいに張り紙がして書きなおしてあった。一字一句ともおろそかにしない作家のきびしさが、そのまま伝ってくるようなおふたりの原稿だった。

美土路はさらに泉鏡花は、小さい字ながら読みやすかったという。鏡花は作品の題名は書くが、署名はしなかったそう。きれいで読みやすかったのは、漱石や島崎藤村、田山花袋らで、花袋は鉛筆で書いていたそう。徳富蘆花もきれいだっただが「中々気むづかしい人で、どうかするとつむじを曲げて叱りつけるので、原稿を頼みに行くのに、中々苦手で誰も引受けるものがない」。そこで、当時整理部長をしていた美土路が、千歳の蘆花邸を訪ねて原稿をたのんだ。

「短かいものを二、三書いて下さいとおそる／＼頼んで見ると、案

外気持よく引受けてくれたのでホッとして、さて原稿料はどのくらいときり出すと、黒眼鏡の底から眼をキラリ光らして、原稿料は別に入りませんとツッケンドンに言われる」

原稿料がいらないという作家も珍らしいが、その時蘆花は何か書きたいことがあったらしい。それにしても、ただ原稿を書いてもらうわけにもゆかず、こまっっている「そう氣にされるなら、僕は果物が好きだからそれでも送って貰おうか、それと校正をよくしてくれ給え、それ以外に条件はない」と、ひどく上機嫌だったという。

蘆花といえは、明治四十三年五月におきた幸徳秋水らのいわゆる大逆事件に関連し、池辺主筆にあてて「天皇陛下に願ひ奉る」の建白書を送った事件が思いおこされる。大逆事件は「無政府主義者が爆発物を製造して過激な行動を計画した」として、幸徳らアナキストのグループが検挙され、明治四十四年一月十八日の判決で、秋水や菅野すがら十二人の死刑が確定した。蘆花は彼らがなんとか死刑からまぬかれることはできないものかと心を痛め、兄の国民新聞社長蘇峰や桂首相に手紙を出したが、無視されたので、一月二十五日手紙を添えて建白書を朝日の池辺主筆に送ったのだった。「幸徳事件は笑止千万なる事共に候」と前置きされた手紙には、次のように書かれた。

「彼等自身が爆裂弾に候彼等を殺すは鉄槌を以て爆裂弾を打砕く也十二人の無政府主義者死して百二十人の無政府主義者を生む所以伏魔殿を打開して一百八の妖星を飛ばす様なものに候

死は彼等の成功也彼等をして志士の面目を全ふして死地に就かしむるが或は情なるべし然も見へ透ひたる前途の禍因を播下するをば座視するに忍びず候是非共恩典幸徳に及ばさるべからずと存候」(朝日社史)

この手紙が池辺主筆に届いたのは、翌二十六日、幸徳らの死刑が執行されたのは、すでに二日前の二十四日未明であった。蘆花が手紙を投函したその日の夕刊には、もう死刑執行が報道されていた。すべては「後の祭り」であった。池辺は蘆花にあて「彼等はいかにも恐ろし

き者共に候処之を殺すも亦恐ろしき感あるを免れざるは小生と御同様に候」と返事を出すに終わった。幸徳らの判決公判を取材した松崎天民は、判決の一瞬を『人間秘話』にこう記している。

「裁判長が厳かな口調で、死刑に処すと言ひ放って、並び居る被告は一斉に静まり返って居たが、裁判長以下がドヤ／＼と退廷すると、直ぐ立上ったのは、ただ一人の女である菅野すがであった。そして皆さんお先に失礼いたします」と言って、声色自若たる風で退廷した。幸徳は背後の弁護士席や傍聴人席の方へジロリと一瞥を投げたが、別に驚いたと言ふ風は見えなかった」

蘆花はこの事件のあと一高で「反逆論」と題する講演を行なった。講演を頼みに行ったのは、一高弁論部の幹事だった元社会党委員長の河上丈太郎ら二人の学生だった。蘆花と対面して演題を聞くと、蘆花はだまったまま、火鉢の灰に「反逆論」と火箸で書いた。河上らが予想した通り、大逆事件に関する講演だとわかった。河上らは講演の直前まで演題は発表しなかった。一高の講堂を学生が埋め、蘆花が演壇に上ったとき、大書された演題が学生に披露された。蘆花が何を話すだろうと片ずをのんでいた学生たちは、一瞬ざわめいたという。当時一高の一年生で、この講演を聞いた随筆家の渋沢秀雄から直接この話を聞いた私は、死刑執行を思いとどまらせようと「天皇陛下に願ひ奉る」建白書まで書いて、朝日新聞に載せてもらおうとした蘆花が、熱っぽく訴える講演に、若き一高健児らがいかに胸を躍らせていたことだろうと想像した。

さて、漱石の入社交渉も大詰めにきた明治四十年三月十五日、池辺主筆は西片町の漱石宅を初めて訪ねた。「朝日社史」によると、漱石は以前から三山の文章を愛読していた。日清戦争のころ、パリにいた三山が、「鉄崑崙」のペンネームで「日本」新聞に連載した「巴里通信」を漱石は「大変面白い」と思った。其頃ひどく愛読したものである」と明治三十九年三月十五日発行の「文章世界」に書いているという。池辺三山の名は早くから知っていたが、おたがい顔をあわせる

のは初めてであった。三山の死後間もない明治四十五年五月発行の『明治維新三大政治家―大久保・岩倉・伊藤論』は、中央公論の瀧田樗陰編で同社から出た三山の唯一の名著である。巻頭に「池辺君の史論に就て」という漱石の文章がある。これに三山との初対面の模様をかなりくわしく書いてある。

「池辺君の名はその前から承知して知っていたが、顔を見るのはその時が始めてなので、どんな風采のどんな恰好の人かまるで心得なかったが、出て面接して見ると大変に偉大な男であった。顔も大きい、手も大きい、肩も大きい、すべて大きいづくめであった。余は彼の体格と彼の坐っている客間のきやしや一方の骨組とを比較して、少し誇張の嫌いはあるが、大仏を待合に招じたと同様に不釣り合いな感を起した」

目の前に初めて見る三山を「すべて大きいづくめ」で「大仏」のようだと思つた漱石は、さらに「西郷といふ人も大方こんな男だったのだらうと思つたのである」と記している。三山に会うまでは、まだ一抹の不安感をぬぐいきれなかった漱石は「これまで話が着々進行してほぼ纏まる段になつたにはなつたが、何だか不安心な所がどこかに残っていた。然るに今日始めて池辺に会つたらその不安心が全く消えた。西郷隆盛に会つたような心持がする」といつている。こうして漱石の朝日入社は最終的には三山との会見で決まつた。以来二人の熱い友情は、三山が永眠した明治四十五年二月二十八日まで親密につづいた。人生は出会いであるとのカロッサの言葉を最初に挙げたのは、この劇的ともいえる人間の不思議な運命的ふれあいを言いたかつたからにはかならない。

漱石が西郷隆盛を連想して、すっかりはれこんでしまつた池辺三山とは、どんな人物だったのか。三山が亡くなつたとき、同郷の徳富蘇峰は「天成の新聞記者」を失なつたといひ「痛惜余りあるは君の死である」と次のように追悼した。

「池辺君は新聞を売る経営者でもなく、新聞を作る編輯者でもな

く、何処までもリーダーライターで、主筆としては誠に立派な人であつたに惜しい事をした。風流な人で絵を描くが、書に至っては恐らく彼れ位立派に書く人は、素人中に無いと思ふ。書は三昧に入るものに近いと言つて宜い。池辺君の人品を書に現したと云ふ程品の好い俗氣の無い書を書いた」

三山を「非凡の論客」と呼んだのは、三宅雪嶺である。「池辺君は極めて悠長なる人であつた。悠揚迫らずとは君の性格を言ひ現す適當なる語である」という。二葉亭四迷を通じて三山と知りあつた内田魯庵も「其重厚の資、其悠揚迫らざる稟性、其剛健にして広濶、毫も些事に拘々たらざる器宇の大なるは、当代稀に見る材である」―三人の追悼の言葉は、明治四十五年二月二十九日付東京朝日に掲載されている。漱石が「偉大な男」と呼んだのと、異口同音といえよう。

池辺三山（本名は吉太郎）は、元治元年（一八六四）熊本に生まれた。父吉十郎は明治十年の西南の役で、西郷隆盛に呼応した熊本隊の隊長であつた。乱後捕われて長崎で斬罪にあつた。吉太郎十四歳のときである。吉十郎はなぜ賊軍と呼ばれた西郷に殉じたのか。彼が処刑を目前にひかえた明治十年十月二十四日司直の求めに応じて書いた「口述書」が『三山遺芳』（昭和三年十二月・三山会発行）に収録されている。以下はその一節。

「本年二月中旬西郷隆盛、桐野利秋、篠原国幹等ヲ暗殺センガ為メ政府ヨリ刺客ヲ遣ハシテルコト露顯セシニ因リ、西郷等其因由ヲ政府ヘ尋問ノ為メ已ニ大兵ヲ卒ヒ上京スルニ決シタリト聞キ果シテ然ラバ刺客ノ一件モ要路ニアル奸臣ノ所為ニ相違ナカルベシト臆想シ愈々此ノ奸邪ヲ掃蕩セント欲シ篤ト考フルニ一旦西郷ガ兵ヲ挙グル時ハ奸臣ヲ斃シ以テ其目的ヲ達スルハ必然ナルベシト雖モ此際空シク傍觀スル時ハ西郷ガ志ヲ得ルノ後ニ仮令權ヲ專ラニスル有ルモ毫モ嘴ヲ挿ム余地ナカルベシ、彼ガ名義トスル処ノモノハ未だ安クニアルヤヲ詳ニセズト雖モ奸臣ヲ除クハ同一徹ナルヲ以テ先ヅ彼ト力ヲ戮セ事成ルノ後ニ至リ彼縱令専横ノ事アルモ我之ヲ匡正スル亦難キニアラザルベシ」

吉十郎は一徹すぎるほど正義感の強い、信念の人であったのだろう。そうでなければ、あえて賊軍の汚名をも物とせず、西郷に殉ずるような行動には出なかったであろう。三山が朝日入社後、勝海舟を自宅に訪ねたとき、海舟は「君のおやじは馬鹿な男だったなあ」と言っただけという。私はこの話を三山の長男で画家の池辺一郎から直接聞いた。三山の母方の祖父永峰秀樹は、海軍兵学校の英語の教官で、海舟とも親交があった。兵学校では東郷平八郎や山本権兵衛らを教えたそうだった。そんな間柄で三山は海舟を訪ねたのだった。海舟が西郷をひそかに敬愛していたことは知られている。西郷の有名な遺訓「命もいらす、名もいらす官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならば、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」は、彼の非凡な人柄をよく物語っているが、海舟が吉十郎を「馬鹿な男」と言ったのは、おそらく西郷のいう「始末に困る人」と同義語であったのだろう。海舟はかねて「熊本では池辺吉十郎という男がおもしろい」と語っていたそうだが、西郷への敬愛感にも似て吉十郎へもひそかな親愛感をいだいていたにちがいない。「馬鹿な男」「おもしろい男」というのは、そうした反語的表現ではなかっただろうか。

三山は死の一週間前の二十一日夜、内田魯庵を自宅に訪ね、三時間近く語りあったことが魯庵の「池辺三山君を哭す」に記されている。

三山は亡母のことから話しはじめ、西南の役の追憶を鹿児島弁と熊本弁をまじえて語ったという。「正史以外の活き／＼した事実を語られて、追憶に堪へざる容子であった」と魯庵はしるす。三山が十四歳のころ、垣間見た桐野利秋や篠原国幹、村田新八らの思い出から賊軍はたとえ敗北しても決して負けたとは言わず「今日は中々な苦戦でございました」と言ったことなど、ふるさとなまりで三山はよくしゃべったらしい。魯庵はこう記している。

「池辺君と余との交際は極めて浅い。が僅に十四歳、父の命を奉じて母を迎へんとして家に帰る途次官軍に捕へられ、月余囚禁せられて敵しく審問せられたる、恐らくは一生忘るゝ能はざる君が少時の追懐

談を、其の最終の週間に聞くを得たるは、何かの因縁が無ければならぬやうな気がして感慨禁ずる能はず、其時の君が肥後訛りの濁音、其時の君が疎髯の戦ぎしさま、其時の君が語り終りて呵々と笑ひたる声は永久に余が心に残りて亡びないであらう」

死を一週間後にひかえた三山がわざわざ魯庵を訪ねて、あかず語ったことは、少年の日に体験した西南の役のことであった。亡母の喪に服していた彼の脳裏をしきりに去来したのは、西郷のために殉死した父吉十郎のことである。そして賊兵の妻としての後の苦しい生活のなかで、自分を育ててくれた母世喜子の面影であったのだろう。孝心厚い三山は、明治四十五年一月二十一日母を失ったあと、五十日間の喪に服し、心臓脚氣を病んでいたにもかかわらず、一切の肉食をしりぞけ、医師のすすめにも応ぜず、牛乳や鶏卵まで絶って毎朝の墓参をかかさなかった。

明治四十五年二月二十九日付東京朝日に「三山居士の面影―少壮時に大家を凌ぐ」の記事がある。それによると、父の刑死後漢学塾に通い、いつも筆墨を持って遊んでいたという。十七歳の春上京、中村敬宇の同人社や慶応義塾に学ぶ。明治十六年佐賀県知事鎌田景弼の招きで学業を中退し、佐賀県学務課員になる。十七年再び上京、有斐学舎の舎監となり、二十一年、二十五歳のとき大阪で紫四朗と「経世評論」を創刊「主筆として筆陣を張り、少壮能く大家を凌ぐの概ありたり」という。このころ「日本」新聞社長陸羯南は、三山の才筆に注目し、二十五年には「日本」新聞客員となり、外交、時事問題に健筆をふるった。しかし、翌二十六年旧藩主細川侯からパリに留学する細川護成の補導役を頼まれて訪欧する。日清戦争が終局に近づいた二十八年春、パリから「日本」新聞に鉄崑崙の名で「巴里通信」を連載、読者に大きな感銘を与えた。漱石も愛読した一人だったことは先に記した。二十八年十月護成とともにパリをたち、アメリカ経由で十一月帰国、翌二十九年十二月大阪朝日の主筆として迎えられた。高橋健三（自持庵）が松方内閣の書記官長として朝日を去ったので、その後任

だった。高橋は安政二年尾張藩士の生まれ。東大の前身、大学南校で法律を学び、杉浦重剛とは同学であった。明治二十六年朝日に迎えられたが「朝日社史」には、次のように記されている。

「なかでも注目すべきは、さきの内閣官報局長で政府の欧化主義に反対、雑誌『日本人』のナショナリズム・グループの論客として知られた自恃庵・高橋健三が客員、実質上の主筆として迎えられ、論説を主宰したことだった。その高い見識と精神家らしい純粹さに裏付けられた雄健闊達な論調は、にわかに中央政界、言論界に重んじられ、大朝の声価を高めることになった」

高橋は明治十八年官報局次長、二十三年局長となったが、二葉亭四迷も同局でロシア語の翻訳にあたり、陸羯南も編輯課長として彼の知遇を受けた。羯南は政府の皮相的な欧化主義に反対する谷干城や浅野長頭らの応援で新聞「日本」を主宰、高橋や杉浦重剛は相談役として彼を助けた。「朝日社史」はいう。

「その『日本』と朝日の関係は、はじめから深く、とくに人的な交流関係が密接だった。三宅雪嶺、志賀重昂、池辺三山、鳥居素川、長谷川如是閑、丸山幹治ら、のち、おおかたが朝日新聞の経営、筆政に重きをなすが、すべてが『日本』育ちの青、壮年記者たちだった」

高橋の引きで明治二十七年朝日に入社した人に東洋学の權威者となつた内藤虎次郎（湖南）がある。湖南は慶応二年秋田県生まれ。秋田師範卒後上京して「日本人」記者となり、志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛が口述する論説を代筆した。ひどいドモリだった雪嶺は、ことに湖南の才筆を重宝がった。明治二十九年朝日を退社した湖南は、京都大学文学部に迎えられ、東洋史の教授として「京大シナ学」の伝統を築いた。『近世文学史論』などの名著があり、彼の教えを受けた東洋学者は多い。内閣官報局で高橋の部下として働いていた長谷川辰之助（二葉亭四迷）が、内藤湖南の紹介で朝日に入社しているから、人の出会いのおもしろさは、またここでも想起される。

三山は明治三十年一月大阪から東京朝日の主筆に転じたが、その後

任には、同郷の後輩鳥居素川を「日本」新聞から迎えた。三山が三十三歳、素川三十歳の働らき盛りであった。「日本」には、漱石の終世の友正岡子規がいた。彼の不滅の業績ともいえる短歌・俳句の革新運動は、すべて「日本」新聞紙上で展開された。「日本」における子規と羯南の熱い交友は、朝日における漱石と三山の友情を連想させる。それはまた明治という時代の文学とジャーナリズムを考えると見落すことのできない記念すべき美しい一輪の火花であったとおもう。

子規が「日本」に入社したのは、明治二十五年羯南の友人加藤恒忠の紹介であった。子規の叔父にあたる加藤は外交官で、のちに貴族院議員をした。子規は羯南を慈父の如く敬愛し、羯南もまた子規の鬼才を愛して、その才能を十分に発揮させた。もし羯南との出会いがなかったら、子規の文業があれほど開花していたかどうか。私はここにも出会いの大いなる祝祭をおもう。子規は大学を中退して「日本」社員になった。その年の六月、学年試験に落第したからだ。試験勉強はそっちのけで、俳句作りに熱中していた。漱石が中退を思いとどまるよう忠告したが、すでに結核におかされていた子規は「そう長く生きられそうにない。今のうちに文学の勉強にうちこんで自分の名前が後生にまで残るようにしたいのだ。君のようにのんびりしてはいられないのだ」と言った。（昭和五四年二月松山市教育委員会編『伝記正岡子規』）

「日本」新聞の編集長だった古島一雄（一念）は、社長の羯南から「会ってくれ」と言われて子規に面接した。「あと一年で卒業するなら入社はそれからでも遅くはあるまい」と言うのと「試験のための学問はいやになった。自分は元来病身だから、一日も早く所信を實行したい」と答えた。「何をやるのか」と聞くと「俳句だ。芭蕉以来の発句が墮落しているから之れを革新したい念願だ」と言い放った。（昭和二十四年十二月・古一念会編『古島一雄』）

こうして「日本」社員になった子規が初めて筆をとったのが「癩祭書屋俳話」。子規の名を高めた俳論で、俳句革新への警鐘であった。

引きつづき「俳諧大要」「俳人蕪村」「歌人に与ふる書」「曙覧之歌」「短歌愚考」「墨汁一滴」「病牀六尺」など短詩型文学の改革や写生文創始など十年間にわたる文業のすべては「日本」新聞を舞台にして発表された。子規は明治三十五年九月十九日、三十六歳で永眠したが、二日前の十七日まで「日本」に「病牀六尺」を連載していた。そして死の前日、枕辺で河東碧梧桐が看守るなかで、次の辞世の句を紙に記したためた。

糸爪咲て痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

をととひのへちまの水も取らざりき

なんとという精神の強さであろう。文学一筋に燃えつきた人生の短かさであつたらう。子規はすでに四年前、碧梧桐の兄河東銓への手紙に次の墓誌銘を送っていた。

「正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ頼祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日歿ス享年三十〇月給四十円」

彼は終生「日本」新聞を愛してやまなかつた。墓誌銘に「日本新聞社員タリ」「月給四十円」と明記したのは、そのあかしである。彼の輝やかなしい文業は、文学者正岡子規としてではなく、あくまでも「日本」新聞社員としてであつた。それは漱石文学のほとんどが朝日社員として朝日紙上に築かれた事実と類似しているといえる。

子規がいかに「日本」新聞を誇りにしていたかについて、寒川鼠骨が「ホトトギス」に載せた「子規居士との座談」という文章に書いている。子規が病床にあつたとき、鼠骨が上京して「日本」入社のこと、子規に相談した折の思い出を記したものである。

京都で悠遊中の鼠骨は、愚庵和尚を訪ねてきた陸羯南と会い、和尚の推薦でほぼ入社の話がまとまり、あとは東京でもう一度羯南と会って正式に決まる段取りとなつていた。上京した彼は、同郷の俳人碧梧

桐の下宿にもぐりこんだ。碧梧桐はそのころ「京華日報」の社会部長で鼠骨を自社に入社させようと考え、社長の二宮素香とも話をつけていた。ところが、鼠骨は朝日の池辺主筆とも会い、上京の趣きを話したところ、入社がまだ確定していないのなら、朝日にこないかと親切にすすめてくれた。

そのころ「日本」は校正係で月給十二円、「京華日報」は社会部記者で十八円、「朝日」は二十五円だった。生活のことを考えれば、朝日へ入社したい気もしきりにして、迷ったあげく子規を訪ねたのだった。おそらく子規も同情して朝日入社に賛成してくれるだろうと半ば期待していたが、子規はひとこと「そりゃあ日本さ」ときっぱり言った。鼠骨はこう書いている。

「此短い一語が千鈞の重みがあり、敵として動かすことが出来ず、反抗し得ない重みを持っていた。私の相談が以ての外で、不都合千万だと怒鳴り気味の顔色でもあつた」

子規は仰臥したまま、しばらく黙然としていたが、やがて静かな口調で、さつさうに言った。

「金があって自由がきくと兎角放逸に流れていかん。人は友を選ばんといかん。日本新聞には正しく学問の出来た人が多い。他の新聞社には碌な人間は居ないぞな。マア辛抱おしや。今の内に本をお読みや。繁華畢意読書難といふぢやないか。本を読むのに左程金はいらんものぞな」

子規の忠告に鼠骨は返す言葉もなかつた。子規が「日本」入社の時の月給は十五円だった。羯南が家族三人食ってゆくのに困るだろうから、もっと収入のよい新聞社に世話しようかというところ、何百円の月給があつても他の新聞社へは入らぬつもりです」と子規は答えている。（『伝記正岡子規』）「正しくて学問の出来た人の多い」日本新聞こそ、子規のやりがいのある唯一の職場であり、他の新聞には目もくれようとはしなかつた。高節の人というべきだろう。では、子規が敬愛してやまなかつた陸羯南とは、どんな人物だったのか。

明治の人物評論家鳥谷春汀は『春汀全集』（明治四二年八月・博文館）第二卷「文士記者月旦」で、文壇の将星として徳富蘇峰、朝比奈礒堂、陸羯南の三人を挙げている。なかでも羯南については、こういう。

「明治年間の新聞紙界に於ける羯南陸實氏の位置は殆ど絶対的なりといふも可なり、筆力識見に於ては、恐らくは彼と匹適し、若くは其の上に出づるものあらむ。新聞記者の伎倆に於ても、彼を以て天下無雙と謂ふべからず。…独り羯南は何人物の機関たらずして、鞏固にして且つ恒久なる精神的独立を保ち得たる文士なりき」

早大卒後「日本」新聞に入社、朝日に転じて編集局長など歴任し、国務大臣になった安藤正純は「日本」在社中、長谷川如是閑、河東碧梧桐と三人で社会面を担当していた。彼は「日本新聞と朝日新聞」(『五十人の新聞人』収録)で羯南の風貌を書いている。

「陸羯南は弘前の出身、身体はさほど大きくなかったが、見るからにガッチリした風貌、常に粗末な和服を着ていた。性格は清貧に甘んじて孤高自ら持し、名利を追わず、権門富貴には断じて属するところなかった。当時は文明開化主義から外国心酔者が多く、政治では官僚万能時代であったから、敢然としてそれと闘うことに精進し、その間、目先の調子を合わせるというような風は微塵もなかった」

もともと新聞「日本」は、安政の不平等条約の改正問題で歴代の政府が、外国との協調主義をとっていたのを不満として、国民主義の立場にたち、その根本的改正を要求して明治二十二年発足した。主宰者の羯南は、発刊第一号に「日本創刊の趣旨」を発表し、新聞の理想を次のように宣言した。

「日本(新聞)は国民精神の回復発揚を自任すと雖も泰西文明の善美は之を知らざるにあらず、其の権利、自由、平等の説は之を重んじ、其の哲学道義の理は之を敬し、其の風俗、慣習も或る点は之を愛し、特に理学、経済、実業の事は之を欣慕する。然れども之を日本に採用するには、其の泰西事物の名あるを以てせずして、只日本の利益

及び幸福に資するの實あるを以てす。故に日本(新聞)は狹隘なる攘夷論の再興にあらず、博愛の間に国民精神を回復發揚するものなり」

羯南の理想は、よくこの一文に凝集されているといえるだろう。ややもすると、彼を評して、あたかも偏狭な国粹論者のように見る人もあるようだが、それはあたらない。国益論者とはいえても、それはかつての戦争中にみられたような頑迷な排外主義とは、性格を全く異にする。「狹隘なる攘夷論の再興にあらず」の言葉に、それは明らかである。「羯南自身、国民主義に重点をおく自由主義者だった」と長谷川如是閑が『ある心の自叙伝』で言っているのは、何よりの証言であろう。

羯南の風格を慕って「日本」には、人材が雲のごとくに集まった。福本日南、三宅雪嶺、古島一雄、国分青崖、正岡子規、池辺三山、長谷川如是閑、河東碧梧桐ら、いずれも明治文化史に名を連ねる人たちばかり。鹿鳴館に象徴されるように、文明開化思想を謳歌した明治二十年代にあって、羯南はよく一管の筆に託して、時代の風潮と闘い、政治権勢に敢然と立ち向った。三山は「権勢を何とも思わぬ一点では明治時代の新聞記者で絶倫だ」と言った。時の政府と闘った彼は、しばしば発行停止の弾圧を受けた。黒田内閣から山県、松方、伊藤内閣を通して、三十回、二百三十日の発行停止を受け、ことに伊藤内閣のときは、二十二回、百三十一日の停止処分にあった。経営は常に苦しかった。しかし、新聞は商品にあらず、營業にあらずとの信念を貫き、平然として動じなかった。条約改正問題では大隈重信と論争し、条約勵行では伊藤博文とやりあい、一步も譲らなかった。その筆鋒は「論壇の一大彩虹であった」と三山は言う。敢然として言論の自由を貫いた羯南に、近衛篤磨も敗政的援助を惜しまなかった。明治三十一年近衛を会長に東亜同文会が設立されたとき、日中提携論者の羯南や雪嶺、三山も積極的に参加した。

羯南と三山の出会い、三山が条約改正運動に参加した二十一歳のころから。三山が大阪で「経世評論」主筆として健筆をふるっていた

ころ、羯南は七歳も年下の三山の才筆に矚目し、三山が「巴里通信」を「日本」に連載して帰国すると、さっそく常勤記者として迎えた。以来二人の親密な交友は、明治四十年一月羯南が五十一歳で亡くなるまで二十年間つづいた。

三山は高橋健三のあとを受けて「日本」から大阪朝日に転じ、東京朝日主筆として今日の朝日の基礎を築いた。彼の朝日入社の際には「言職」という文章であった。新聞記者は、言論の職人であるべきだというのである。新聞記者が議論を勉強するのは、農民が農地を耕し、商人が売買につとめ、職工が製作にはげむのと何らかわらない。当時よくいわれた「社会の木鐸」とか「無冠の帝王」といった指導者意識や特権意識は捨て、言論の職人に徹すべきであるというのが、三山の新聞記者道であった。

こうした三山の考え方は、羯南が明治二十三年十月「日本」の論説で「新聞記者」と題して述べた「新聞記者の職は一の天職なりと言ふべし。：眼中に国家を置き自ら進んで其の犠牲と為るの覚悟あらざれば不可なり」と呼応しあうものがあるといえよう。熊本日日新聞社長だった伊豆富人は、早稲田の学生時代から新聞記者をあこがれ、上京すると間もなく郷里の大先輩三山を自宅に訪ねた日の思い出を『新聞に生きる』（昭和四十六年・時事通信社）に書いている。三山は田舎から出てきた青年に、こうさとした。

「新聞記者として成功するには新聞記者としての天分を備えておらねばならぬ。新聞記者は名利に超越して、いわゆる富貴も淫する能わず、貧賤も移す能わず、威武も屈する能わざる信念をもって正義を貫き、国家社会を指導する覚悟がなければならぬ」

慈父のような暖かさで相談相手になってくれたと伊豆は回想している。

羯南や三山の新聞論に、私は近代日本の新聞ジャーナリズムの原点がひそんでいるように思う。長谷川如是閑は「個性をもつ新聞を」という一文で「日本」新聞と朝日新聞の関係をこう指摘する。

「朝日は日本新聞の系統を追いつながら、近代的ナショナルリズムの立場を堅持したのである。つまり国民的立場をもって、近代文明を完成することを念願とする、いわゆるリベリズムに立ったナショナルリズムである。この立場は今もなお朝日新聞には、伝統的に保たれているように思う」

まさにその原点を言いあてているとは、いえないだろうか。政治思想史の丸山真男は、敗戦直後の昭和二十二年二月号の「中央公論」に「陸羯南―人と思ふ」を書いた。「羯南は雪嶺、蘇峰、知泉（朝比奈）三山（池辺）日南（福本）愛山（山路）とならぶ明治中期新聞界の巨峰」と呼び、羯南の思想にふれて「その日本主義がいかにその後のものに比して豊かな世界性と健康な進歩性を具えていたかは窮い知られるであろう」と述べている。さらに「現代もまた、まさに新しき日本新聞と陸羯南とを切に求めているのではなからうか」とその論文を結んでいる。敗戦というかつてない悲劇にあり、すべての価値感がコペルニクス的変転を見せていた混沌の世相のなかで、新しき「日本」新聞と羯南の出現を強く願望した丸山の視点は、改めて見直されるべきであろう。当時は日本主義という言葉さえ、見失われ、白眼視された時代風潮だったのだから、丸山があえてこのかくれた明治の思想家陸羯南に思いをはせた視角は、余計光っているように思われる。

羯南の国民主義に対抗して、平民主義、欧化主義を標榜して明治二十三年二月蘇峰によって創刊されたのが国民新聞であった。自由主義をかかげたこの新聞は、青年の魅力をそそり、日清戦争の直前には、第一位の部数を誇るまでに発展した。蘇峰は明治・大正・昭和の三代を生き抜いた大ジャーナリストとして盛名をほまにしたが、同郷の池辺三山とは、いささか肌合いを異にしていた。そんなエピソードを美土路昌一は「新聞の今昔」の連載第一回「布衣の宰相」に書いている。

明治天皇が列車で新橋駅に着かれた日、美土路記者は池辺主筆のお供をしてホームにいた。三山は壁際を背にして立っていたという。お出

迎えの桂総理や各大臣らが次々にホームにあらわれ、池辺の姿を見つけると、いちいち池辺のところに来て、丁寧にあいさつをした。「池辺さんはそのたびにニコニコしながら、ただヤアといって右手で山高帽を一寸ばかり持上げて答礼している」。そんな池辺と対照的に、ある大新聞の社長が足まめに歩き回って、政府の要人らにあいさつしていた。「全く対照的な光景だ。文学通り布衣の宰相。僕もあんなになりたいな、としみじみ感じたものである」と若き日の美土路記者は、三山へのあこがれをこめて書いている。

昭和三十七年秋に書かれたこの文章を読んだとき「ある大新聞の社長」とは、いったいだれだろうと、私は長い間気にかかっていた。それからだいぶん経ったある日、三山の長男の池辺一郎に会ったとき、それを話題にした。「私も気になって、美土路さんにたずねたら、あれは蘇峰だよということでした」といわれた。地味で重厚な人柄だった三山と時代の流れを見るのに余りにも敏で、一部には変節漢とまでいわれた蘇峰の対照的な姿がしのばれて興味はつきなかった。

さて、朝日に入社した漱石は、明治四十年五月三日東京朝日に「入社の辞」を発表した。大阪朝日は「嬉しき義務」と改題して四日と五日に分載したと「社史」はしるす。当時の漱石の心情が卒直に表明されているので、長い文章の一部を引用する。

「大学を辞して朝日新聞に這入ったら逢ふ人が皆驚いた顔をして居る。中には何故だと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程に不思議な現象とは思はなかった。余が新聞屋として成功するかせぬかは固より疑問である」

こんな書出しである。そして「大学は名誉ある学者の巢を喰っている所かも知れない」結構な職業といながら、次のように、開らきなおったような歯切れのよい口調がつづく。

「新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなからう。月棒を上げてもらふ必要はなからう。勅任官になる必要はなからう。新聞が商売である如く大学も

商売である。新聞が下卑た商売であれば、大学も下卑た商売である。只個人として営業しているのと、御上で御営業になるのとの差だけである」

いかにも江戸っ子らしい人をくったようなタンカである。食ってゆくために、やむなく大学にしがみついてゆくつもりだった漱石に「突然朝日新聞から入社せぬかと云ふ相談を受けた」そこで「担任の仕事はと聞くと只文芸に関する作物を適宜の量に適宜の時に供給すればよいとの事である。文芸上の述作を生命とする余にとつて是程難有い事はない。是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない。成功するか、しないか杯と考へて居られるものぢやない。博士や教授や勅任官杯の事を念頭にかけて、うん／＼、きゆう／＼云っていられるものぢやない」

朝日の好遇に満ちた漱石の気持が卒直に述べられている。いちいち出社しなくても、書齋で述作していればよいという条件もよほど気に入ったらしく「食ってさへ行かれれば何を苦しんでザットのイフのを振り廻す必要があらう。やめるなど言ってもやめて仕舞ふ」——こうして大学から解放された漱石は、まず大阪へ出かけて、村山龍平ら朝日の幹部と会い、京都に遊んで、自由人としての空気を満喫した。「入社」の辞は、こんな文章で結ばれている。

「驚は身を逆まにして初音を張る。余は心を空にして四年來の塵を肺の奥から吐き出した。是も新聞屋になった御陰である。

人生意気に感ずとか何とか云ふ。変り物の余を変り物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の爲めに、変り物として出来る限り尽すは余の嬉しき義務である」

水を得た魚のように自由な作家活動に入った漱石は、「入社の辞」の翌日の紙面から「文芸の哲学的基礎」を連載、引続き最初の連載小説「虞美人草」を六月二十三日から百二十七回にわたって発表した。

「昨夜豊隆子と森川町を散歩して草花を二鉢買った。植木屋に何と云ふ花かと聞いて見たら虞美人草だと言ふ。折柄小説の題に窮して予

告の時期の後れるのを気の毒に思っ居つたので、好加減ながら、ついで花の名を拝借して巻頭に冠らす事にした」

こんな予告が発表されると、たいへんな反響を呼び、デパートには虞美人草浴衣が売り出され、宝石店では虞美人草指輪まで登場、新聞の売り子は「漱石の虞美人草」と大声で新聞を売り歩く騒ぎだったという。『漱石・人とその文学』

好評のうちに「虞美人草」の連載が終わると、次は二葉亭四迷の入社第二作「平凡」の六十二回連載が始まった。時に漱石四十一歳、四迷は四十四歳だった。「三山」としては、二葉亭を説得して小説を書かせるのに苦労したが、漱石と二葉亭という二人の作家を擁して朝日の小説欄の刷新をはかろうといふかねてのねがいが実現したわけである（『朝日社史』）

四迷の連載が終わると、漱石は続いて「坑夫」「三四郎」「それから」「彼岸過迄」「行人」「心」「道草」を発表、絶筆となった「明暗」を百八十八回で中絶するまで、精力的に書いた。このほか「文鳥」「夢十夜」「永日小品」「思ひ出す事など」「ケーベル先生」「硝子戸の中」などの小品を発表、紙価を大いに高からしめた。その間、漱石門の阿部次郎、安倍能成、森田草平、小宮豊隆、武者小路実篤らが朝日の文芸欄で健筆を競い、「朝日文芸の牙城は燦然たる光を放って、当時の新聞界の一偉観であった」（『漱石・人とその文学』）。朝日文芸欄が創設されたのは、明治四十二年十一月だが、そのいきさつについて「朝日社史」はこう記す。

「ちょうど漱石が『虞美人草』を執筆しはじめたころから社外の人たちによる新鮮な短文や随筆が、ときおり社会面に掲載されるようになった。寺田寅彦がT・R生またはH・K生の匿名で『猫六題』『万年筆』『話の種』『歳時記新註』などをよせ、戸川秋骨が『郊外生活』『輪廓の文学』などをのせ、このほか鈴木三重吉らも寄稿した。これらはいずれも漱石の紹介によるものであった。漱石は知人や弟子の面倒をよくみ、前述のように、多くの作家の小説を朝日に推薦した

が、小説にかぎらず、随筆、評論、短文の類にいたるまで、いいものであれば朝日に掲載するための労を惜しまなかった」

漱石が多くの作家の小説を朝日に推薦した例として大塚楠緒子「空薫（そらだき）」森田草平「煤烟」泉鏡花「白鷺」永井荷風「冷笑」長塚節「土」などを「社史」は挙げている。漱石は明治四十一年二月ごろ、渋川社会部長に文芸欄の設置を提案したが、紙面に余裕がないということで実現しなかった。ところが国民新聞がその年の十月、高濱虚子を主宰者として文芸欄を新設、虚子の依頼で漱石の談話筆記などが国民新聞に出るようになった。これが刺激となって朝日にも文芸欄を設けるべきだとの意見が強まったと「社史」はいう。

「社史」によると、漱石は文芸欄の事務担当者として森田草平の入社を考えていた。草平は前年、塩原温泉の山中で平塚雷鳥と心中未遂事件をおこし、漱石のすすめで、この恋愛事件を小説化し、明治四十二年一月「煤烟」と題して朝日に連載された。草平が一躍作家として登場した作品で当時は評判になった。だが、草平の入社については、村山社長が「あのような事件をおこした男を社員にするわけにはいかない」と強く反対して実現しなかった。やむなく漱石は社の了解をえて、文芸欄の費用から六十円を給料として支給することで草平に事務をとらせたという。

漱石が草平を通じて執筆をすすめた長塚節の「土」は、明治四十三年六月十三日から連載が始まったが「回を追うにつれて読者の評判がわるく、社内でも不評であった」（『社史』）。最初四十回くらいの約束だったが「やめさせろ」という社内の声を尻目に、百五十一回まで連載はつづいた。三山は「あれはいいものだ。気兼ねしないで十分書かせるがよろう」といって、擁護したという。そのころ、漱石は伊豆の修善寺で療養中だったが、どこまでも漱石を信頼し、かばおうとする三山の友情のあらわれだった。

森田草平の「自叙伝」は、明治四十四年四月二十七日から九十回連載されたが、これがまた社内で問題になった。雷鳥との恋をモデルに

した「煤烟」のむしかえしにすぎないとか、反道徳的で面白くないとかの意見があった。天民の『人間秘話』によると、そんなある日、三山が「あの自叙伝はどうですか」と天民の意見を求めた。「文章も新しいもんですし、何しろ一生懸命と云ふ作品ですね。私は傑作だと思って居ますが、世間でも評判が好いようですよ」と答えると、三山はいかにも満足そうに「それでしよう。私もそう思っている」と言ったという。草平の作品をなじる社内動きについて、天民は「文芸と道徳との問題ではあるが、それを一種の反池辺熱に応用して三山に肉搏したかのやうな観があったと一部では取沙汰する者さへあった」と記している。

とかく組織というものは、いつの世も、いかなる世界であれ、多少の差はあるが、うるさいものだ。まして個性の強い一匹狼をもって任ずる自由人の集団である新聞社では、なおさらのことであろう。「自叙伝」問題で社内がざわめいていたころ、三山は牛込若松町に家を新築した。それをまた妙にかんぐる者がいて、社内の騒音に油をそいだようだ。天民はこう書いている。

「時の首相桂侯爵の心事に対して池辺氏の論法には、理解があったり、同情が見えたりした。池辺君もタガが緩んだなどと、社内でも取沙汰する者があったらしかった。自叙伝事件以来、家屋の新築や此の論法の推移などで、痛くも無い腹を探られたやうな気持がして池辺氏も面白く無いやうであった。その前から夏目漱石を追出せなど云ふ運動が政治部の人々の間に企てられて居たが、それは池辺氏の言葉の一つで、何うにも為らないものに結果が着いて居たのであった」

安藤正純や中野正剛ら政治部の記者たちが画策していたやうだと天民は言う。「自叙伝」問題をきっかけにおきた漱石や三山を批判する社内の声は、さらに発展して杉村楚人冠や渋川玄耳への反感という空気さえ出ていたという。名主筆とうたわれた池辺三山にも、このころからようやくかげりが見えはじめたやうだ。漱石が修善寺で胃の大患と闘い、ようやく危機を脱した明治四十四年九月、三山は突如として

辞表を出し、社の幹部がとめるのもきかず朝日を去った。三山はなぜ退社したのか。理由はいろいろあったのだろうが、名論説記者といわれた丸山幹治は『鳥居素川―頰杖つきて』（昭和二五年・朝日新聞社）の「解題」で次のように述べている。

「南極探検は朝日新聞の冒険でもあった。白瀬薩陸軍中尉は明治の末期に南極探検の壮挙を企て、大隈重信伯（後の候）を会頭とする後援会は華々しく組織され、朝日新聞に後援を依頼した。朝日社はこれを快諾、直ちに五千元を寄附し、更に紙上、有志の義金を募り、その応募金額四万七千九百余円に達した。しかもこの金額だけでは、探検用の船舶を購入し、隊員の糧食から被服、器具一切の経費としてやつとであるが、池辺三山氏は是非とも学術研究員を隊員に加へなければならぬと主張し、村山社長と意見が衝突した。…この学術研究員の問題から池辺三山氏は東京朝日を去ることになったのである」

三山退社の直接の原因は、南極探検学術研究員の参加問題で村山社長と意見が衝突したことだろうが、楚人冠日記には「自叙伝」問題で三山と弓削田秋江が論争したことが記されている。弓削田は漱石入社するとき一役果たした人である。「九月二十五日弓削田強硬、池辺を出さずんば已まずといふ、池辺も亦出てしまはんといふ、いよいよ事となる」。漱石が主宰する文芸欄を門下生らが勝手な真似をするのは、三山が漱石をかばいすぎるからだという意見さえあったというから、あれやこれや面白くないことが積み重なって、ついに三山の退社となったのであろう。松岡譲は『漱石・人とその文学』でこう記す。

「輝かしい歴史をもった朝日文芸欄も約二ケ年の後廃止になった。それには社内の事情もあり、漱石がこの人の為めならとまで信じあった仲である主筆の池辺三山が辞任したので、漱石も進退を共にしやうとして辞表まで出したやうな事件もあり、傍々（かたがた）社に対しておかしいふ欄を自分が担当しているのが工合が悪い事も手伝っていたらしいのであるが、それらの事情に輪をかけて漱石を悩ましたのは、血氣盛りの森田だの小宮だのといふ若い門下、文壇的な名を成して

来たのに思ひ上がって、この牙城を我もの顔に人もなげに振舞ひ出した浅墓な態度を憐れみ憤ったによるものであらう」

（追記）残念ながら拙稿は中途半端でいったん筆を置きます。このあと三山と漱石・四迷の友情、啄木・楚人冠らと漱石のことを書くつもりでしたが、紙数が予定を越えてしまいました。もし許されますなら続稿は次回にでも書かせていただきたいと願っております。